B 145　芳香の効果について

共立女子大家政　神山恵三

目的　平安の昔より芳香を被服にたきしめて快適な被服環境をしつらえてきた。また、最近では繊維の内部に芳香を含浸されものもできてきていっそう被服香粧の分野がひろがってきた。しかし、その効果については主観的評価にとどまっていた。その客観的評価を求めようとするものである。

方法　ひとつは自律訓練法あるいは気功による精神集中を行うと末梢の血流が増大し，皮膚温が上昇することが知られている，このことを利用する。すなわち、芳香環境と非芳香環境で前者の方がより昇温するかを見る方法である。第2は瞳孔の光反射に及ぼす芳香の影響を見る方法である。他の条件を一定にするために人工気候室において所定の気温，湿度，照度にして芳香，非芳香の差異を求めた。被検者成年女子である。瞳孔の反射は，縮・散瞳のそれぞれ最大値に達するまでの時間，速・加速度を自動的に計測する方法である。芳香の組成はガスマススペクトルメーターを用いた。

結果　沈香の香り，ユリの香りおよび昔から薫衣に用いた黒方の香りについて、芳香と指先き温の上昇の関連が特にあるかを見たが，ユリの香りに特に関連性が有意に確かめられた。瞳孔の光反射によってこれらの芳香が沈香の香りについては中枢の活性化はおさえられて鎮静的に、ユリの香りは活性化，黒方は定かでないという結果が得られた。なお，空気中の香りのみでなくヒノキ湯，ネズ湯の皮膚温に与える効果，瞳孔反射に与える効果にについてみた。ヒノキ湯について光刺激後の面積に有意な効果があり，ネズ湯については三陰交に、単純湯に比して、下脚温で4℃もより高く昇温した。